

## ESDからみた「戦後新教育コア・カリキュラム」研究序説

### —「御所中プラン」を中心に—

富山 敦史・松岡 敬興（山口大学）

要旨：戦後間もない1950（昭和25）年に民主主義の担い手の育成を目標に『御所中プラン』（現奈良県御所市）が開発された。それは、コア・カリキュラムに着目し、従来の教科カリキュラム構成から脱し、生徒各々が日常の生活を踏まえた課題を見出しその解決を図るべく各教科に関わる学習内容を編みあげることが意図したものであった。本稿では本プランの特徴と新教育に挑む当時の教員の教育への思いとその原点となる「調査活動」についての概要を紹介する。加えて戦後新教育期に誕生した「御所中プラン」と2020年度からスタートする新学習指導要領の理念とを比較し、その相違点をESDの視点から考察することの意義を提案し、今後研究を進める序説としたい。

キーワード：コア・カリキュラム core curriculum、戦後新教育 Postwar New Education、民主主義 Democratic education、ESD Education for Sustainable Development

#### I はじめに

終戦直後、日本の教育界はかつてない大きな転換点を迎えた。1945（昭和20）年9月15日、文部省は「新日本建設の教育方針」を出した。ついで同年10月22日、連合軍総司令部が「日本教育制度の管理」に関する司令を出した。この2つの方針、司令を教育現場において具現化するために、1946（昭和21）年8月「教育刷新委員会」が発足した。同年11月3日には「日本国憲法」公布（翌年5月3日「日本国憲法」施行）、翌1947（昭和22）年3月「教育基本法」「学校教育法」公布、そして、文部省が「学習指導要領一般編（試案）」を発表した。これをうけて全国の小中学校では地域の特性、各学校の実情や児童（生徒）の特性に応じたカリキュラム研究と教育課程の編成が性急に行われることとなった。奈良県においても、新日本建設のための教育課程の研究、実践がはじまった（注1）。御所中学校（当時は南葛城郡御所町）では、「御所中プラン（コア・カリキュラム）」とその名前が示すとおり、県内では少数派の「コア・カリキュラム」に基づいた実践の研究を行ったことが記録されている（注2）。本稿では、御所中学校が編成した「御所中プラン（コア・カリキュラム）」（注3）を検討することにより、当時の教職員たちが民主主義国家となる「新日本建設」のためのカリキュラム研究と教育課程の編成にいかにか苦心したのか、その意識と具体的内容の一端を紹介し、本プランの特徴と新教育に挑む

当時の教員の教育への思いとその原点となる「調査活動」の部分についての概要を紹介する。加えて戦後新教育期に誕生した「御所中プラン」と2020年度からスタートする新学習指導要領の理念とを比較し、その相違点をESDの視点から考察することの意義を提案したい。

## II 「御所中プラン」の構成

### 1. 「御所中プラン」の目次

<b>御所中プラン（コア・カリキュラム）</b>	
<b>一、本校の教育計画</b>	(一)
(一) 本校教育の目標	(一)
(二) 学校運営の概要	(二)
(三) 本校のカリキュラム構想	(四)
<b>二、本校のカリキュラム構成</b>	(八)
(一) 仕事の分担	(八)
(二) 構成の道すじ	(九)
(三) 中心学習の構成	(三六)
(四) 周辺学習の構成	(三九)
<b>三、中心学習単元表</b>	(四〇)
(一) 第一学年単元表	(四〇)
(二) 第二学年単元表	(五二)
(三) 第三学年単元表	(六四)
<b>四、学習指導の実践と諸問題</b>	(七八)
(一) 中心学習指導について	(七八)
(二) 周辺学習指導について	(一〇〇)
(三) 学習実践の稿をむすぶにあたって	(一〇二)
(四) 実施に伴う諸問題	(一〇四)
<b>五、日常生活指導について</b>	(一一五)
(一) ホームルーム	(一一五)
(二) クラブ活動	(一一八)
(三) 生徒会	(一二九)
<b>六、ホームルーム指導計画表</b>	(一二二)
別表 周辺学習プログラム	(一二二)
一、第一学年 二、第二学年 三、第三学年	

目次によれば、「御所中プラン」は、全6章で構成されている（\*表記はママ）。はじめに、教育計画が教育目標、学校運営の概要（構想一覧表）、カリキュラム構想の3つ柱で述べられ、第2章では、カリキュラム構成が示される。ここでは、第一に教員の仕事の分担、次に構成の道筋（計画・実態調査＜方針・方法・項目・社会調査・生徒調査・基本学力テスト・結果・課題＞）、それらをうけて中心学習と周辺学習の構成が述べられている。第3章では、学年別の中心学習単元表。第4章では、学習指導の実践とそれに関わる諸問題が示されている。とくに周辺学習としての各教科学習の実態表が具体的に示されていることは注目に値する。第5章では、日常生活指導として、ホームルーム、クラブ活動、生徒会、第6章ではホームルーム指導計画表が示されている。目次に別表として学年別周辺学習プログラムと書かれているが該当部分はなく、冊子の最後は、「日々の生活を

こんな「生活基準」として、「イ 起床」から「ロ 就寝」までのルール（生活基準）が示されている。

## 2. 御所中学校の教育計画

第1章の本校教育の目標では、冒頭に文部省「新教育指針」の「新しい日本の教育が何をめざし、どのような点に重きをおき、それをどのような方法で実行すべきか」の課題が掲げられたあとに続いて、

従来の我が国の教育が、その目標、その内容、その方法の末端まで、人間性、人格、個性を十分に尊重しなかった。今、立ち上がろうとする日本に最大の要望は、「人間の発見」でなければならぬ。〈中略〉人間の自然性、能力、要求、それが発見され、尊重され、その芽をゆがめず、おさえず、のばすことが近代世界史を一貫する人間主義に立脚した人生の目的であろう。すでに発見された人間は、機械でもどれいでもない、まさに人間たるの資格において、人格として尊重され、手段のための人間ではなく、それ自体絶対価値において尊重されるところに、人格の平等がとりあげられねばならぬ。

と述べられ、新しい教育の課題が「人間の個性を自由に伸ばすもの」とであると続けている。そして、

今回我が校がコア・カリキュラム実験を実施するに際しても、教育の基盤を人間性に置き、その目的を人格に、更に実践的方法の根底を個性に求め、具体的な我が校生徒、学校、地域の実態に即應しつつ、新しい教育への展開に当たって目標を次のように立てている。

と結び、10項目の「我が校のめざす人間像」を挙げている。次にそれを具現化するものとして「教育方針」を5つ挙げている。

- 一、生徒の人格を平等に尊重する。
- 一、自主的、協同的生活態度を尊重する。
- 一、生徒の必要、希望、興味、を尊重する。
- 一、生徒の個性に即應する。
- 一、地域社会及び生徒の実際生活に即應する。

この教育方針は「教育基本法」の真意を貫こうとするものであると述べ、「教育の目標が生徒にだけ向けられ生徒にだけ営まれていたのが古い教育であったとすると、新しい教育は、生徒と共に生きていく、指導者に対し、多分にむけられなければならない」として、「より高い価値への希望によころびを感じ学校と地域の綜力を協わせ、愛と熱意にも

えて懸命の努力を期している」と締めくくり、家庭、地域、PTAとのワークシップの必要性を指摘している。

### 3. 「(三)、本校のカリキュラム構想」

ここでは、新しいカリキュラムの構想にあたり、冒頭から当時の教員たちの苦悩が語られている。主要なものを抜粋して以下に示す。

- ① 中学校の学習指導はどうならなければならないだろうか。
- ② 古い教育からどのようにして脱けようか。
- ③ 「…古い世界に育って来たわれわれには何かしら古い教育にも未練がある。一体新しい教育はどのようにやったらよいのだろうか、不安は限りなく連続する。
- ④ 討議学習・グループ学習・社会科とわれわれの前に次々と展開される新しい主張は、唯々形にのみとられ、何の爲にやるのかさえ考える暇を與えない。
- ⑤ 加うるに借家住宅・教師不足・教科書不足は懊悩困迷を増すばかりであった。

と、眼前に立ちだかる現実への苦悩と戸惑いが正直に素直に述べられている。そして、これらの解決への糸口が「カリキュラムの問題」にあると見だし、研究の出発点を次のように述べる。

私達は家庭に於いても社会に於いても『自主的に判断し、解決し実践して行ける民主的な生活人。』を作り度いと念願している。自分の個性を生かし乍ら人と協力して仕事をどんどんやっつけていける人間を作る爲には、單に知識のみを與える教育であつてはならない。『生活力のある人』——具体的な問題にぶつかつて科学的な、社会的ないろいろの能力を綜合して自由自在に活用して解決して行く人を作らなければならない。」

このような目標を描いて生徒を教育しようとする時、生徒達に何を学ばせ、何をしつけていつたらよいのであろうか。いいかえればどんな生活経験を生徒達にさせたら、彼等は理想的な人間として育ち、理想的な社会を作ることが出来るのであろうか。

このような立場に立つて教育上可能であり然も望ましい生活経験を教育として選擇し、分類し、配列しようとするのである。

#### 4. 従来型「教科カリキュラムへの反省」と新教育カリキュラムの観点

ここで注目されたのは、いきなり新教育カリキュラムの観点へ突き進むのではなく、従来の「教科カリキュラムへの反省」が示されていることである。このことによって次に示される新教育カリキュラムとの差異が明確に認識されるのである。すなわち、

- ① 生活の場が與えられていない。
- ② 統合性に乏しい。
- ③ 個別性に乏しい。
- ④ 具体性に乏しい。
- ⑤ 心をこめた自発活動に乏しい。
- ⑥ 全体計画に乏しい。
- ⑦ 学ぶ青少年への顧慮が乏しい。
- ⑧ 日常生活の問題と有力に取り組むことが出来ない。

と、以上の八点を教科カリキュラムの欠陥として挙げ、

新しい学校は、民主社会に立派に立つて行く実質的な資質—創造の能力、協力の態度、社会的な感受性、反省的な思考、寛容の精神等—をめざしている。これらの民主的資質は知的に理解すると言うよりも、実際的な経験によつて、身につけることが出来るのである。

と述べ、最後に「生活の問題を正しく処理出来る場と能力を與えることを眼目とするカリキュラムの必要性を切実に感ずる。」と締めくくっている。

続けて、上記の目標を実現する新カリキュラムの観点を6点呈示して「新しいカリキュラムへの歩み」を記している。

- ① 生活カリキュラム…生活の問題を解決していくため、生徒の自発活動を重んじ生徒のために意義あるカリキュラム
- ② 経験カリキュラム…実際の場を與えて意義ある総合的な経験をつませ生活の現実を具体的に学ばせるカリキュラム
- ③ 地域社会に立脚したカリキュラム…地域社会の中の生活人として学習するカリキュラム
- ④ 総合的な統一のあるカリキュラム…幼稚園から大学まで縦に統一ある、各々の学習分野が緊密に総合されたカリキュラム
- ⑤ 単元をもつカリキュラム…現実の社会の生活課題を解決する単元の形に於てプロジェクトとして学習が進むカリキュラム

- ⑥ 中核のあるカリキュラム…一つの課題、一つの中心的な目的に向つて総合的に働きかける、あらゆる生活がそれを核として活動を総合するような中心学習（コア）をもつカリキュラム

そして、「自主的、民主的、実践的、社会人の育成を目指し、実社会における正常な大人の生活と学校生活に於ける生徒の生活とをその基本的な構造に於て一致させることが必要」で、このような原則に立つカリキュラムは中心学習の過程と周辺学習の過程をもつ有機的な構造を備えているものでなければならない」と指摘している。

## II 御所中学校のカリキュラム構成の道筋

第2章「二、本校のカリキュラム構成」において、どのような道筋でカリキュラムを構成していけばよいか示されている。

- ① カリキュラムを構成する仕事の分担はどのようにしたらよいか（構成委員会）
- ② どんなカリキュラムを作ったらよいか（いろいろなカリキュラムの研究）
- ③ 教育の目標を考える（我々のめざす人間像）
- ④ どんな順序で構成していけばよいか
- ⑤ 実態調査をどのようにしたらよいか
- ⑥ 中心学習及び周辺学習をどのように組立てたらよいか
- ⑦ 生徒の発達段階をどのように考えたらよいか
- ⑧ 学校施設や運営をどのように改善したらよいか
- ⑨ 学習計画をどのように立てたらよいか
- ⑩ 日課表や行事はどのようにしたらよいか
- ⑪ 生徒指導との関連はどうか

そして、「夫々の教師は一日の日課を終ると、息付く暇もなく之等の問題について討議して解決点を見出すための努力が繰り返された」と結ばれ、「カリキュラム構成は、總ての教師が有機的に協力することによつて始めて達成されるもので教職員の和の缺けている所に健全なカリキュラムは存在し得ない」と仕事を推進するにあたり、分業的に分けて働くようにしたとも記されている。ここには、限られた時間の中で、具体的実証的な実践研究に取り組むことの困難さを教職員一体となつて乗り越え、民主的な「新日本建設」のための新しい教育、新しいカリキュラムを創り出そうとする躍動する教師たちの使命と自負、エネルギーが感じられる。

ESD からみた「戦後新教育コア・カリキュラム」研究序説  
— 「御所中プラン」を中心に —

### Ⅲ 御所中プランの「実態調査」について

「コア・カリキュラム」を構成していくには、Ⅱで示された「目的」と「カリキュラム構成」を具体化していくための実態調査が出発点となる。ここでは御所中学校が取り組んだ「実態調査」について検討する。

#### 1. 概要

実態調査の方針として、生徒たちが生活している実社会の科学的な検討、及び生活する生徒の実態についての究明があげられる。この実践の留意点については、出来るだけ計画的かつ目的をはっきりさせること、そして問題のみではなく、統計の方法結果を何に利用するのかについても計画する。どこの学校で調査しても、同様な結果が出るようなものは避ける。自校と同じような環境の調査結果を利用する。同時に調査対象を一部の人に偏らないように留意している。

#### 2. 方法

社会調査には質問紙法を多用している。また家庭訪問などによる面接法を組み入れている。加えて育友会の会合や、その他の会合の意見を活用している。「家庭訪問や父兄が学校を訪れて話す言葉の内容」や、「町の人々の話題などにも十分の注意を拂って傾聴する必要がある」との記述がある。具体的には、問題の数をなるべく少なくして重点的に選定している。例えば、家庭生活の科学性に着目すると「あなたの家庭では家計簿をつけていますか」の問いがあげられる。教育用語を用いずに、平易な出題である。なお調査対象は、職域層、年齢層、地域、性別、配分、各層にまで及んでいる。

#### 3. 実態調査計画（注4）

まず生活地盤調査があげられる。自然的な面、社会的な面、歴史的な面に着目し、官公所の紹介のもとで進めている。また世論調査を実施している。経済上の諸問題、交通上の諸問題、政治上の諸問題、保健上の諸問題等について、質問紙法と面接法を駆使しながら取り組んでいる。さらに家庭調査①においては、生地及び現在地調査、家族調査では、年齢、学歴、職業を問うている。また住宅調査では、敷地、坪数、部屋数、電燈数などを問い、教育環境では、ラジオの有無、家庭での指導者、勉強室、勉強机、勉強時間、図書参考図書、などを、質問紙法や面接法によって、調べている。さらに食糧調査も行っている。家庭調査②では、子供の躰調査、家計調査、読書調査、娯楽調査があげられ、家庭調査③では、生活規律調査が質問紙法により行われている。

#### 4. 留意点

調査に要する膨大な労力と負担のために、調査倒れにならないこと、必要に応じて逐次追加調査を行ってカリキュラムの修正を行うこととしている。つまり調査結果をカリキュラムの構成や修正に利用できるものを選定し、教育活動の改善に生かせるようにとの工夫がなされている。そこで調査項目については、多岐広汎に亘るあらゆる調査問題を検討し、その調査大系を確立した後、同一類型に分類し、さらに具体的な問題に引き下げて項目を決定している。

#### 5. 生徒調査

本調査では、年齢的発達段階調査として、課外読書、ラジオの聴取、新聞購読を取りあげている。また興味調査として、歴史的関心と地理的な関心を問うている。さらに将来希望調査として、進学、希望する職業、家庭への念い、御所町への念願、日本の國に対する念願、学校への念願について聞いている。

加えて生活調査、社会に対する理解・関心度の調査、知能テスト（田中B式）、健康生活調査、基礎学力調査を行っている。特徴的なものとして、国語、数学、理科、英語の学力調査があげられる。アメリカ占領軍占領下において、多岐にわたり実態調査が行われ、その構えとして生徒、家庭・地域の実態を踏まえて、今の御所町に必要な教育と何かを絞り込むための調査として有効であるといえる。

#### 6. 社会調査の実際

本調査は、生徒が生活する実社会の諸問題を総合的に捉え、地域社会の全体の構造や基本的なはたらきを調査するとしている。現学習指導要領と照合すると、総合的な学習の時間における探求の活動に近く、総合単元の内容に近い。生徒は学習単元が作られると、この単元の展開を活動的にするために、社会調査に取り組む。指導者は、そのデータを活用しながら教材研究を進める。同時に生徒の学習活動の資料にもなる。ここで具体的に調査項目について、見てみることにする。御所町の将来に対する考えを問う質問と選択肢については、以下の通りである。

○ 御所町の発展についてどのように考えますか

- 1 現在のままでよろしい
- 2 近村と合併すべきである
- 3 南葛城郡を合併して市制にすべきである
- 4 その他

○ 御所町の発展に一番邪魔になっているものは何ですか

- 1 位置が南北にかたよっている
- 2 交通が不便である

## ESD からみた「戦後新教育コア・カリキュラム」研究序説

### －「御所中プラン」を中心に－

- 3 天然資源が貧弱である 4 面積が小さい 5 財政的悪条件  
6 公德心の低下 7 政治の貧困 8 その他
- あなたは将来、御所町をどのような方向に発展させるべきと考えますか
- 1 観光都市 2 商業都市 3 工業都市 4 文化都市  
5 農業生産地 6 その他
- 御所町の発展をめぐり、今すぐ改善すべき点にどんなことがありますか
- 1 衛生施設 2 道路、交通整理 3 娯楽施設 4 文化施設  
5 食糧需給 6 住宅建設 7 保全施設（警察など） 8 その他

#### 7. 調査結果とカリキュラム編成

調査は300名を対象に行い、御所町の課題と社会問題を把握できている。得られたデータは大人の世界の問題であり、生徒のものとは異なることから、教育的な意味づけを指導者が行うことが必要であった。生活課題として、公衆電話の設置、従業員の増加、速報可能な条件、交通機関の発達、バスの改善、尺土一五條間の電車開通、トラック道の建設、交通道德の高揚があげられている。また関連する社会問題として、輸送の不敏速、道路の改修、交通事故の頻発を指摘している。調査結果を踏まえつつ、生徒の発達段階に沿いながら、各々の興味、要求、能力を調査し、その結果を連動させてカリキュラムを編成することが大切である。生徒が日常生活を送る地域の実情を踏まえ、教科・領域を横断する学習単元を設定することで、地域に関心を抱き、地域に学ぶことの具現化に繋げることができる。こうした学びを通して、生徒が自ら課題を見出し、その解決に向けて自ら考えた後、仲間と議論し、多面的に糸口を共有し、解決をめざす実践へと誘う取組になるものとする。

#### IV おわりに

「御所中プラン」は大部に亘るため、今回は第1章第2章の、プランの概要と作成にあたる教職員の思い、そして、実態調査の一端を示したにすぎない。引き続き調査研究を進めていきたいと考えるが、最後に今後の研究の視点を提示し、本稿のまとめとしたい。

新学習指導要領では、カリキュラムマネジメントの充実が強調されており、「児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図って

## ESD からみた「戦後新教育コア・カリキュラム」研究序説

### －「御所中プラン」を中心に－

いく」ことが、小学校学習指導要領総則に記されている。中でも特徴的なのは、教科横断的な視点でカリキュラムを編成するとき、テーマを決めてその内容に関連する各教科の単元を結び着けるところである。地域のことを学ぶ「〇〇学」のような実践は、このことが当てはまる具体例でもある。また総合的な学習の時間においても、自ら課題を見出しその解決の方途を考え、実践し、問題解決へと向かう取組として展開されている。同一の研究テーマを複数の生徒が関わり、多様な見方や考え方に触れ合い、それぞれの思考を深めるのである。ここで、このことと御所プランとを照合してみる。

御所中プランでは、課題解決学習のテーマを見出すために、地域を知るための学習を行っている。様々なアンケートや聞き取り調査を行い、得られた情報を生かしながら、町が抱える課題を新たに見出し、その解決をめざした取組が進められている。生徒の学びは、教員から与えられたものではなく、自ら実態を知り、そこから見出された課題を克服しようとするものである。ここに生活に根ざした学びの原点があり、当事者意識を持った学びができ、自主性を育むことにも繋がる。地域のことは、そこで生活する生徒が自分事として課題を受け止め、その克服に向けた取組に関わることが、何よりも高い教育効果をもたらすものであると考える。その意味で、あらためてESDの観点から「コア・カリキュラム」としての「御所中プラン」の本質を明らかにしていくことは、今後の日本の教育の具体的な方向性を考えていくことにも大いに資することだと考えられる。

#### 注

(注1) 『奈良県教育百二十年史』(奈良県教育委員会, 1995.3)の「カリキュラム時代の出現」(P.209-210)の項に以下の記述がある。

昭和22(1947)年12月に重松鷹泰が着任した奈良女子校等師範学校附属小学校では、「しごと」「けいこ」「なかよし」という教育構造をもった「奈良プラン」による学習法を実施し、県内はもとよりわが国の戦後の初等教育に大きな影響を与えるとともに、その先導的役割を果たした。また、先進的な学校では、アメリカの進歩的な教育課程などを参考に独自の教育計画を作成し、「〇〇プラン」として発表した。それらの多くは教科カリキュラムの型を採用し、ごく少数の学校はコア・カリキュラムに近い型をとり入れたものであった。

(注2) 『御所市史』(御所市史編纂委員会, 1965.3)の「御所中学校」(p.932-933)の項には、御所中学校が奈良県教育委員会の実験学校に指定された記録が次のように残っている。

同年六月三日、昭和二十四年二十五年度実験学校委嘱される。研究主題「コアカリキュラムの実践」。(中略)同二十五年二月二十一日、県指定コアカリキュラムの実践発表会開催。同二十六年三月二十五日、県教育委員会より実践学校表彰を受ける。

(注3) 「御所中プラン(コア・カリキュラム)」の奥付には、「昭和25年2月21日発行(非賣品)編集兼發行人 奥山新八郎」とある。奥山氏は御所中学校の初代校長である。

(注4) 「御所中プラン」所収の「實態調査計畫」

# ESD からみた「戦後新教育コア・カリキュラム」研究序説

## —「御所中プラン」を中心に—

「実態調査計画 調査方法」 (○=質問紙法 △=実験法 □=面接法 ×=官公所紹介)

(I)生活基盤調査 ×自然的な面

×社会的な面

×歴史的な面

(II)世論調査 ○□経済上の問題

○□交通上の問題

○□政治上の問題

○□保健上の問題

(II)家庭調査

①家庭調査 ○生地及現在地調査

○□家族調査(年齢、学歴、職業)

○□住宅調査(敷地、坪数、部屋数、電燈数)

○□教育環境(ラジオの有無、家庭での指導者、勉強部屋、勉強机、勉強時

間、図書参考書)

○□食糧調査

②家庭調査 ○□子供の躰調査

○家計調査

○讀書調査

○娯楽調査

③家庭調査 ○生活規律調査

(III)生徒調査

○経験領域調査

年齢的発達段階調査 ○課題讀書調査

○ラジオ聴取調査

○新聞購読調査

興味調査

○歴史的関心調査

○地理的関心調査

将来希望調査

○□進学

○希望する職業調査

ESD からみた「戦後新教育コア・カリキュラム」研究序説  
—「御所中プラン」を中心に—

○家庭への念いの調査

○御所町への念願調査

○日本の国に対する念願調査

○学校への念願調査

生活調査

○社会について

○□学校に於て

○社会に対する理解、関心程度の調査

△知能テスト（田中B式）

△健康生活調査

体格調査

体力調査

○△基礎学力

国語、数学、理科、英語

(IV)学校調査

教育に対し地域社会の要求についての調査（世論調査）

学校実態調査

環境調査

施設調査

※「御所中プラン—コア・カリキュラム」の復刻版（p 1—p 39）については、「戦後新教育研究資料—「御所中プラン」の復刻—」富山敦史（「常葉初等教育研究」第4号 p104—p116 2019年3月）に掲載している。また、この復刻版の続きである「中心学習單元表」（P40—P77）の部分を「戦後新教育研究資料—「御所中プラン」の復刻その2—」富山敦史（「常葉初等教育研究」第5号 2020年3月刊行）に掲載する予定である。